

カエサル

2021. 11. 18

ユリウス・カエサル、ジュリアス・シーザーと言ったほうがわかるかもしれない。私は、高校で世界史の授業を選択したが、同じ人物の名前なのに、ラテン語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、英語などで変わってしまうことに混乱を覚え、学習意欲が減退した記憶がある。やっぱり、自分には日本史が向いていると、勝手に判断した。

カエサルは数々の名言を残している。「賽は投げられた」「ブルータス、お前もか」きっと聞いたことがあるだろう。

塩野七生さんという歴史作家がいる。イタリアに住むようになって、その存在を知った。塩野さんはローマ在住だった。代表作に『ローマ人の物語』がある。全15巻の大作である。私は、何気なく1巻目を取り寄せ、読んでみた。一気に読み終わった。そこから、『ローマ人の物語』の虜となってしまった。そこに登場する人物たちに魅了されたのである。

中でも、ランキング1位が、カエサルである。塩野さんも、カエサルのことが一番好きはずである。そのカエサルの言葉に「多くの人は見たいと欲するものしか見ない」というものがある。例として戦場の話を挙げる。リーダーと兵卒では、見るものが違うかと言ったら、本当は同じである。だが、一兵卒はその重要性に気づかない。いや、気づきたくないなのである。敵が来るなどと思いたくないため、敵を見ないのである。そこが、リーダーとそうでない人の間に存在する厳とした差である。これは、現代の組織や集団でも同じであろう。

カエサルは、見たくない現実も見ることができた人物だった。あの時代のローマに何が必要で、何が不必要であるかを明快に見定めた人だった。カエサルはスピーチの達人でもある。人間は、みんな希望を持ちたいのである。人間にとって最後まで残るものは希望である。だから、希望を与えること、つまり我々はやれるよと思わせることが、リーダーの一番大切な仕事なのである。カエサルをはじめ、あの当時のリーダーたちは、言葉によって民衆を酔わせることができていた。希望を持たせるリーダーたちがいた。

日本はというと、能力は高いのかもしれないが、希望を持たせてくれるリーダーがいないのだろう。これは、政治の世界だけではない。学校などの組織や集団でも同じである。カエサルを目指すつもりはないが、もう少し希望を意識したリーダーにならなければならないと思う。

書齋を片付けていたら、『ローマ人の物語』全15巻が並んでいた。懐かしく、ローマの魅力的な人物が蘇ってきた。何とんでもカエサルから学ぶことが多い。カエサルの名は、ドイツ語のカイザーやロシア語のツァーリなど、皇帝を表す言葉の語源でもある。